

## 前期：キリスト教と政治思想

オリエンテーション

### 1. イデオロギーとユートピア

- 1-1：リクール1
- 1-2：マルクスとマルクス主義
- 1-3：黙示的終末論の系譜
- 1-4：ティリッヒ1
- 1-5：ティリッヒ2
- 1-6：リクール2
- 1-7：知恵思想の視点から
- 1-8：パウロとローマ帝国

### 2. キリスト教と社会主義

- 2-1：宗教社会主義—ティリッヒ—
- 2-2：宗教社会主義から解放の神学へ

## Exkurs

キリスト教と仏教1

キリスト教と仏教2

## <前回>宗教社会主義

### (1) バルトの宗教社会主義批判

- 1. スイスやドイツにおいてなされたキリスト教と社会主義との積極的な関係づけの試みとしての宗教社会主義。クッター、ラガツ
- 2. カール・バルト：自由主義神学、ザーフェンヴィルの労働問題、宗教社会主義運動  
→ 第一次世界大戦における戦争政策に対する神学者を含むドイツ知識人の公然たる支持、ドイツのキリスト教社会主義の愛国主義運動への転換。  
宗教社会主義から弁証法神学への転換：新しい世代の神学者において共有。
- 4. 批判の論点：宗教社会主義がその正しさを主張する際に、「キリスト教的」「宗教的」であると述べる。宗教社会主義における「宗教的」と「社会的」を「宗教的—社会的」という仕方では結合する「ハイフン」が人間の不遜（巨人主義）であるとの批判。
- 5. 『ローマ書講解』の基本的認識：「神は天にいまし、汝は地上にいる！」(ibid., 294)との神と人間の「無限の質的差異」に基づいている。バルトにおける政教分離原則の徹底化。「『ローマ書』における二元論は、既述のところから既に十分に明瞭な通り、『根源』における一元論(Monismus in Ursprung)に基づいている。」(大崎、1987、404)

↓

バルト以後における宗教社会主義の可能性。バルトの宗教論（宗教批判）の妥当性の吟味。キリスト教社会主義の限界がその楽観的な人間理解にある、宗教社会主義の問題も、同じ人間の問いへと収斂する。

### (2) ティリッヒと宗教社会主義

- 2. 宗教が人間の可能性の事柄であるとするならば、この問題は、さらに、人間存在の問い（人間学）に至らざるを得ない。

3. ティリッヒの宗教社会主義論、『社会主義的決断』（1933年）

基礎的人間学：社会的構想力 → 政治思想の二つの系譜

「世界一内一存在」「起源一要請」、実体原理（形成原理）と修正原理（批判原理）

↓

政治的ロマン主義とその意義、自由主義・社会主義とその限界

宗教的社会主義の課題：社会主義と起源の力の再統合、合理性と非合理性

6. 「この起源神話的な意識が、政治におけるあらゆる保守的でロマン主義的な思惟の根なのである」（Tillich, 1933, 291）。特に、民族起源神話は、民族共同体の起源を血や地において象徴的に表現し、共同体の自然的な絆を意識可能な仕方で提示する。

↓

自己同一性としてのイデオロギー：政治的ロマン主義の力の秘密。

7. 起源神話のイデオロギーに対する批判：預言者のまた合理的、ユートピア的？

8. しかし、宗教的批判と政治的批判を人間理解に基づいて統合するというだけでは、論じられるべき問題の全貌はいまだ十分に示されたとは言えない。

1920年代後半における、ティリッヒの信仰的現実主義、プロテスタンティズム論。

形成と批判（実体原理と修正原理、内実と形式）、超合理性（恩恵）と合理性という二組の対概念——信仰的現実主義は、超合理性と合理性の関連において成立する——に従って展開。

この枠組みより、宗教社会主義論を展開する試み。

二組の対概念 → 四つの組み合わせ＝イデオロギーとユートピアの弁証法

超合理的形成、超合理的批判、合理的形成、合理的批判

預言者による起源神話批判＝超合理的批判

人文主義的な起源神話批判＝合理的批判

9. 起源の二重性・両義性：イデオロギーの諸次元

起源神話とその突破（預言者、ヒューマニズム）→ 起源の両義性

「これは、起源が両義的であること意味している。起源の中には、真の起源と現実的な起源との緊張がある」、「現実的な起源は真の起源の表現ではあるが、真の起源を覆い隠し歪曲するものでもあるのだ。」（ibid., 292）

10. 「真の起源」：超合理的形成（恩恵）から超合理的批判（預言）が生成する動性

ユートピアからイデオロギーへ：外部あるいは他者から到来するもの

形成—批判 → （形成→）自己同一性 → 正統化 → 倒錯・転倒

→ → → → 批判 → → → 幻想

↓

キリスト教的伝統における起源の力と社会主義との関係構築という宗教社会主義の課題は、超合理的形成、超合理的批判、合理的形成、合理的批判の四つのものを動的に関係づけことによって遂行可能。

11. 宗教社会主義を社会的構想力の観点から再解釈し、その思想的意義を再考すること。

合理的形成と合理的批判において具体化されることの重要性

マルクス主義の評価はまだ決着していない。

## 2. キリスト教と社会主義

### 2-2：宗教社会主義から解放の神学へ

#### (1) キリスト教と社会主義

1. キリスト教的理念：隣人愛、平等、平和

+

終末以前・地上における現実化（人間の責任・使命）

↓

キリスト教の実践的課題 → 近代的状況：社会分析・社会批判（合理性）の要求

2. キリスト教社会主義：貧困・格差、労働運動 cf. マルクス主義との関わり

イギリス→アメリカ→日本

宗教社会主義：スイス・ドイツ

3. 第二次世界大戦後：地域と伝統、問題領域における多様な動向

ローマ・カトリック教会の労働司祭運動：フランス、韓国

解放の神学：ラテン・アメリカから

#### (2) 解放の神学とその多様性

4. Christopher Rowland (ed.), *The Cambridge Companion to Liberation Theology*,  
Cambridge University Press, 2007 (1999).

Introduction: the theology of liberation (Christopher Rowland)

Part I: Contemporary Liberation Theology

- 1 The task and content of liberation theology (G. Gutierrez translated by Judith Condor)
- 2 'Action is the life of all': the praxis-based epistemology of liberation theology (Zoe Bennett)
- 3 Liberation theology in Asia (Bastiaan Wielenga)
- 4 Black theology (Edward Antonio)
- 5 Feminist theology: a critical theology of liberation (Mary Grey)
- 6 Demythologising liberation theology: reflections on power, poverty and sexuality (Marcella Maria Althaus-Reid)

Part II: Aspects of Liberation Theology

- 7 The origins and character of the base ecclesial community: a Brazilian perspective (Andrew Dawson)
- 8 The Bible and the poor: a new way of doing theology (Gerald West)
- 9 Liberation and reconstruction: the unfinished agenda (Charles Villa-Vicencio)

Part III: Analysis and Criticism

- 10 Liberation theology and the Roman Catholic Church (Peter Hebblethwaite)
- 11 Marxism, liberation theology and the way of negation (Denys Turner)
- 12 The economics of liberation theology (Valpy Fitzgerald)
- 13 Political theology, tradition and modernity (Oliver O'Donovan)

## 14 Globalising liberation theology: the American context, and coda (Ivan Petrella)

### Epilogue: the future of liberation theology (Christopher Rowland)

#### 5. 状況とメッセージの両極性 (ティリッヒ) から見た「解放の神学」

- ・現実的な人間の状況における具体的な「解放」であること。

Theology and experience: a way of doing theology from the perspective of the poor and marginalised

Liberation theology: a means of ethical and intellectual orientation

- ・キリスト教神学であること。

Liberation theology and the Church

The base ecclesial communities

The Bible and liberation theology

Historical antecedents to liberation theology

#### 6. 実践に対する詩的構想力 (存在転換) の先行性: リクール

### (3) 黒人神学と社会的構想力

#### 7. コーン『抑圧された者の神』新教出版社。

##### はじめに

「最も重要な要素として機能するのは、多くの場合、特定な社会・政治的状況における、彼の、また彼女の「個人」史なのである」

「私は黒人神学の知的基盤を論じ、被抑圧者に対する神の解放に終始しないような、いかなる福音分析も「それ自身」非キリスト教的であることを、神学的に明らかにしようと努めてきた。」(1)

「ここではただ、そもそも神学者たちが自らの状況の諸限界を忘れて、自分たちはあらゆる所であらゆる人々のために語っているのだと思いが上がる時にだけ、彼らの神学はイデオロギーと化し、したがって抑圧的・帝国主義的になるのだ、ということを指摘すれば十分であろう。欧米神学の多くは、たといそれが解放や自由について語っている場合でも、そのような性格を帯びている。」(6)

「すべての神学は特殊なものであり、したがって、その特殊性によって限界づけられているが、所与の特殊性が指示している真理は限界づけられていない。」

「解放という黒人神学の主題に耳を傾けることは、われわれの連関の中で自由の真理のために闘うということである。私が黒人性の具体性を強調するのは、その特殊性こそが、私の社会的・政治的連関の中で抑圧とは何であり、解放とは何であるかを、最もよく説明しているからである。」(7)

## I 序論

「黒人の宗教と白人の宗教は本質的に同じものである。なぜなら、白人が黒人に「キリスト教」を紹介したのだから、というように仮定することは、もちろんの可能である。しかしながら、そのような仮定は、神学者から黒人の宗教的思考様式に対する生き生きとした洞察を剥奪してしまうことになるであろう。なぜならば、そのような仕方では、思考と社

S. Ashina

会的実存との間にある重要な関係を認識することができないからである。」「フォイエルバッハ」「マルクス」(32)

「白人神学校の教授たちだけでなく、あの黒人たちもまた、白人的経験だけが神的事柄に関する問いと答えのための適切な文脈を提供しているのだ、と今まで確信してきたのである。彼らは自らの経験の狭さと、自らの神学的表現の特殊性を認識していない。」(38)

「私の論点は、われわれの社会的・歴史的な文脈は、ただわれわれが神に語りかける問いだけでなく、その問いに対して与えられる答えの態様ないし形式をも決定する、ということである。」(39)

## II 真理を語る

「黒人経験の神学的機能を探究すること」

神学の資料としての黒人経験

「黒人神学は、黒人経験の構造と形式を明らかにしなければならない。なぜならば、解釈の諸範疇は、黒人経験それ自体の思考形式から生起してくるものであるからである。」(42)

「それは教会的経験と同じ歴史的共同体から創出されたものであり、したがって、自らの夢と大望に基づいて生を形成し、かつ生きようとする、人々の試みを表現しているからである。このような黒人的経験に含まれるものは、動物物語、民話、奴隷の俗歌、ブルース、個人的経験の記録等である。」(51)

「黒人経験についてのもう一つの重要な神学的資料は、奴隷および元奴隷の物語、すなわち、黒人の勝利と敗北の個人的記録である、「もっと最近の黒人文学」「ハーレム・ルネッサンス(一九二〇年代および三〇年代)」の詩人たち、およびその後継者たち」「自由への闘いを指摘ヴィジョンで表現した。」(56)

「われわれ黒人神学者たちは、真理を「語る」ためには、黒人性についての真正の経験を提示しなければならない。」(60)

黒人経験・聖書・イエス・キリスト

「黒人神学の資料としての黒人経験は、伝統的なキリスト教神学の資料として同定されている聖書に対して、どのように関係づけられるのであろうか」(60)

「彼らは単に自分自身のことだけを取り扱っているのではないということである。彼らはもう一つの別の現実について語っているのである」、「黒人神学を単に黒人の文化史に解消してしまうことを防いでいるのは、この超越性の肯定なのである。黒人にとって、超越的現実とは、聖書が語っているイエス・キリストにほかならない。聖書は、イエス・キリストにおける神の自己啓示の証言である。かくして、黒人経験は聖書が黒人神学の一資料であることを要求しているのである。なぜなら、まさに聖書こそが、奴隷たちに、奴隷主たちのそれとは根本的に異なる神観を肯定することを可能ならしめたからである。」(61)

「イエス・キリストの証言としての聖書の重要性はだからといって、黒人神学が西欧キリスト教の伝統と歴史を無視してよい、ということの意味するものではない。それはただ、その伝統についてのわれわれの研究は、黒人によって解釈されたような仕方での、聖書に啓示されたみ言葉の理解の光に照らして遂行されなければならない、ということの意味し

ているのである。」(62)

「われわれは初代の教会教父たちを、彼らがわれわれの現代的状況の危急的問いを提示していないという理由で批判することはできない」、「だが他方において、われわれに過去の信仰解釈者たちを評価することを可能ならしめる、人間経験における共通要素というものも存在する。」(62-63)

「神学の主題とは、神学的言説の厳密な性格を造り出し、そのことによって、神学的言説を他の言説から区別するところのものである。それとは対照的に、神学の資料とは、神学の主題を正しく表現せしめうる材料のことである。イエス・キリストは、黒人の希望と夢の内容であるゆえに、黒人神学の主題である。」(63)

「黒人性と神性とは、一つの現実性として弁証法的に結合されるのである。」(68)

「イエスを被抑圧者の解放者として見ることをしない、いかなる時代の福音解釈も異端的である。」(70)

## V 黒人神学とイデオロギー

「イデオロギーと、知識の社会的規定との関係」「イデオロギーとは、ある観念または諸観念が、ある個人または集団の主観的利害の機能にほかならないことを意味する、変形した思考のことである。」(139)

「イデオロギーとは対照的に、社会的規定は、必ずしも、思考の歪曲ではない。それは、思考における社会的先験性のことであり、それなくしては思考は存在しえない、価値論的格子のことである。社会的規定は、思考の形成、つまり、そこから思考の諸範疇が生起する、基盤を問題にする。」(140)

「「個別的」意味におけるイデオロギーとは、聖書的物語を、僅かの人間の経済的・社会的利害に照らして語ることである。それは、あたかも貧しい者と彼らの解放が、福音の使命にとって付随的なものであるかのような仕方で、聖書を解釈することである。」(141)

「「総体的」意味におけるイデオロギーとは、その知的格子が先験的に聖書的物語の真理を排除している、思考形式を指示している。これは、神的解放の物語にとって本質的な思考範疇で考えない、人々の特徴である。」(143)

「神学者たちが問わなければならない問いは、彼らの神学が社会的利害によって規定されているか否か、の問題ではなく、むしろ、「誰の」社会的利害、抑圧者か、それとも被抑圧者なのか、という問題である、聖書的立脚点からして、単に、イデオロギーとは神のみ言葉の、あるいは社会集団の願望との同一視である、というだけでは、間違いである、」「貧しき者の歴史的意識から生起してこない神学は、イデオロギーなのである。」(145)

「神学がそれについて語る、神的啓示は、人間的経験から引き出した、言語学的諸定式に閉じ込めてしまうことはできない。したがって、自らの思惟範疇の有限性を受容しようとせず、あたかも自分が全真理、しかも真理のみを知っているかのように語る、いかなる神学も、神冒瀆、つまり、神的真理のイデオロギー的歪曲の罪を犯すのである。」(146)

「白人神学とイデオロギーとの同一視は、私の発生学的起源とは帰属を異にする同僚神学者に対する、無鉄砲なこきおろしとして、意図されたものではない、」「わずかの例外を別にすれば、これらの福音解釈者たちは、余りにも白人文化の社会的先験性に規定されて

S. Ashina

いるために、有色人種の解放はせいぜい周辺の命題であるにすぎない、ということである、  
「特定な白人神学者の悪しき意図のせいであるよりも、彼らの思考がそこに生起する、社会的連関によるものである。」（147）

「キリスト教神学者とは、それゆえ、社会的実存と神的啓示との微妙な均衡関係に固着しつつ、福音解釈へのその解釈学的意識が、被抑圧者の自由の闘いによって、規定されている人のことである。」（148）

「解放の物語と神の物語との同一視は、人間的状況から引き出したものではない。キリスト教神学は、人間的必要性から神へと進行するのではなく、神の啓示からわれわれの必要性へと進行する。」（150）

「このような批判的問いについての決定は、彼らの自由への闘いの根源でありたもうお方の、出来事を通しての臨在に出会う際の、解放の闘いの中にある人々にこそ、委ねなければならぬ。」（152）

「真の検証は、われわれが、自由のための歴史的闘争において、同じ側につくように導かれるか否かに、かかっている。」（153）

「客観的に証明する」方法は何もない」（153）

「だが、このような譲歩は、無制限的な相対性を肯定するものではない、超主観的な「何事か」は、物語において言い表わされるし、事実、物語において具体化されているのである。」（154）

「すべての民族は、語るべき物語、すなわち、彼らが自分の存在理由を規定し、かつ肯定する際に、自分自身と子孫たちと世界に向かって、自分たちがいかに考え、いかに生きているかについて、語るべきなにかを持っている。物語は、無から有へ、非存在から存在へと移行する、奇跡を言い表わし、かつそれに参与するものである。」（154）

「われわれは、聖書物語は、われわれの主観的状态から独立している、それ自身の完全性と真理を持っている、と仮定しなければならない。われわれは、何でもかんでも、聖書物語の中に読みこむ自由を持ってはいないのである、彼の物語は、われらと共にいたもう、彼の臨在の恵みによって可能とされる信仰を通して、われわれの物語となるのである。」（156）

「彼らが述べた言葉を、真剣に聞くことによって、われわれは、われわれの現在の主観性から導き出されるのである、われわれ自身の時代と状況の外にいる、他者に耳を傾けることによって」（157）

「われわれ自身の物語がイデオロギー的になる、つまり、真理を聞くことを不可能にする閉じられた体系になるのは、われわれが、他の物語を聞かなくなった時である。」（158）

#### 8. コーンの黒人神学における社会的構想力の問題

ユートピアは、自らの外部にその源を持つ必要がある。

#### 9. 社会的構想力：経験と聖書との間

経験：個人と共同体

実践：倫理あるいはエートスを支えるものはなにか。

夢の素材そして規範：聖書

↓

人間的現実性を構成する虚構の働き→ユートピア

小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会。

<翻訳の問題> 翻訳のゆがみの基礎レベル

E.P.Sanders, *Paul*, Oxford University Press, 1991.

We begin with the problem of English translations. Modern English has two parents, Norman French and Anglo-Saxon. ... Anglo-Saxon was a Germanic language.

In the case of key words in Paul's vocabulary, however, we have a difficulty, since some forms drove others out, rather than remaining as duplicates. The best translations of Paul's word *dikaiosyne* is the Anglo-Saxon 'righteousness', not the French 'justification', since 'justification' often carries the nuance of defensiveness or of a legal excuse, and we shall see that this was not Paul's meaning. Paul's cognate verb, *dikaion*, however, no longer has an Anglo-Saxon equivalent. The verb *rihtwisian* was lost long ago, and we have only the French 'justify'.

Similarity 'faith' best translates Paul's *pistis*, since 'belief' often connotes 'opinion', which is far from what Paul meant. But English has no verb which corresponds to 'faith', and so for Paul's verb *pisteuein* English have to use 'believe'. In this case the Anglo-Saxon verb have driven out the French. A table will make the problem clear. (45)

Terminology for righteousness and faith

	Greek	Anglo-Saxon	French
Noun	<i>dikaiosyne</i>	righteousness	justification
Adj.	<i>dikaios</i>	righteous	just
Verb	<i>dikaion</i>		to justify
Noun	<i>pistis</i>	belief	faith
Adj.	<i>pistos</i>	believing	faithful
Verb	<i>pisteuein</i>	to believe	

(46)

<参考文献>

- 1 . Christopher Rowland (ed.), *The Cambridge Companion to Liberation Theology*, Cambridge University Press, 2007 (1999).
- 2 . Susan Frank Parsons (ed.), *The Cambridge Companion to Feminist Theology*, Cambridge University Press, 2002.
- 3 . Anthony B. Bradley, *Liberating Black Theology. The Bible and the Black Experience in America*, Crossway, 2010.
- 4 . James H. Cone, *God of the Oppressed*, The Seabury Press, 1975.